

法華經方便品再考

— 假頌解釈における問題点 —

田 中 典 彦

方便品第七十六偈以下九十七偈にいたる、いわゆる小善成仏を説くといわれてゐるのは散文には全く説かれていないところであり、その意味において多くの問題を含んでいると言えよう。今は現存する梵本を中心に諸訳を比較検討しながら、特に重要であると思われる abhūṣi の語は注目してその解釈について考察する。いふと云ふ。ルヒヤ七十六偈を代表的に取つ上よい所を以て、

vīrye ca dhyāne ca kṛtadhi�āraḥ prajñāya vā cintita eti dharmaḥ/vividhāni puṇyāni yehi te sarvi bodhiya abhūṣi lābhinah//
トある。

abhūṣi たゞの形からすれば √bhu のトオリベットと考へねば、しかも偈全体からみてみると te となるやうの形が解せられるから 3.pl と考へられる。あるいは Root-aorist と屬する √bhu のトオリベット 3. pl の形が classical 文法によつては abhūvān であり、他の人称、他の数におつては語尾—ṣi の形をうるゝのはなし。ルヒヤで次に語尾変化のみに注目してみるならば、—ṣi がたゞやれに近い形をうるゝだ Saorist にやけん (active) 2. sg. -ṣis, (active) 3. sg.-ṣis, (middle) 1. sg.-si やあら、ペークは第三類アオリベット呼ばれる動詞の 1. sg. 2. sg. 3. sg. ルヒヤにならぬ。ルヒヤが

文章から te が示されるといふが、三人称であることは明確であると考えられるから、以上の中 3. sg のものだけが認めたれないとなる。しかしそのように考えるならばまた新たな問題に直面する。つまり te が複数の形であるに対し、3. sg の動詞でそれを受けることが可能かどうかの問題である。この場合 te を集合名詞的のものと考へなければならぬこととなる。しかしこのよろに考へねばひとの難点は七八八、七十九、八十偈等に見られるように ye~te の構文中 ye に導かれる文中の動詞が明らかに 3. pl の形をもつてゐることから知り得る。したがつてこでは文章における文法的一致という点を考慮して abhūṣi もまた 3. pl やあると考へねるを得ないであろう。語尾—ṣi に関しては問題が残るが、3. pl の形が単数として用いられることが多々あることからその逆をしても 3. sg.-ṣit が複数を示すに用いられ得ることが予想せられ、-ṣit の形から -ṣi の形へは偈頌におこつては韻の関係等から多くなされる用法である。Edgerton は *(Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar)* P. 159 によつて、√bhu のトオリベットの abhūṣi の形が法華經等の偈頌において全く一般的に用いられる形であるとし、それが 1. sg および 3. pl として考へられるひとと述べてゐる。このひとは多く使用例を吟味し、文全体の構成や意味等を考えた上で結論である。されにしごく以上のやうな点から abhūṣi が √bhu の aorist 3. pl の特殊な形であることが認められる。

ルヒヤ次にこの理解のゆゑに、法華經のこの部分との関係からその意味を考えねばならない。アオリベットは不定過去の意であり、第一過去といわれる如く時制的には過去である。ところが一般的に方便品のこの箇所の解釈として、小善成仏を説くのであり、これら

の善行によつて仏と成る、あるいは仏と成るであらうことを示す。現在あるいは未来的な意味としてこの語を解釈してゐるようである。そこで諸訳を取り上げながらの箇所を考察する。妙法蓮華經は「皆已成仏道」とし、正法華經は「斯等皆當成得仏道」である。またケルンの英訳では“Have all of them reached enlightenment”とされ、チベット訳は de dag thams cad byan chub thob par hygyur めなひトシヌ。この中、妙法華と英訳は abhūsi を第三過去 3. pl と解してゐるが、アーティ、「仏道を成した」としてゐる。この言葉はおもむく abhūsi がアオリストの形をとつてゐるといふ。散文の部分との相應を考えたからであろうと解することができる。つまり、散文は如來出現の動機や目的を述べる箇所において過去の如來、未來の如來、現在の如來の順に従つて全く同内容のことと繰り返して述べ、しかもそれらを説明して偶に説くとして同順に同内容を記しているが、今問題としている箇所が正にこの過去の如來の所に入つていると考へられるからである。しかしそのように考へるには過去、未來、現在に同内容が繰り返されながら、小善成仏といわれることに關しては過去の所にだけしか述べられていないことの意味が考へられねばならないであろう。

次に正法華の解釈について考へると abhūsi の訳として「当に成得せん」あるいは「當に成得すべし」を与えてゐる。これは可能法的な意味として解している。しかし可能法としても可能法アオリストとして解するにも困難なようである。また可能法と未來形がほとんど同義的に用いられることが多いことを考へられるが S-future の形において abha- まやが求められるのみやはり困難が多いといふ。

チベット訳では abhūsi に對して未來を示す助動詞 hygyur を thob par (得る) へじら動詞に加えた形でもつて訳してゐる。梵本を忠実に訳すためにチベット語には多くの助動詞が用いられていると考へられてゐることからこの場合も hygyur が abhūsi の意味を正確に伝えるために使われたものと考えられる。言語的な相違があるとしても梵文では abhūsi labhinah であつて「得者となる」が原形であり、abhūsi にはどいまだらか動詞としての「成る」の意味がある。それに対してもチベット語では「得る」へじら動詞に助動詞 hygyur が加えられたものである。したがつて hygyur は abhūsi というアオリストの形を考慮してのものと受けとれるであろう。このことからすればチベット訳は abhūsi を未來を示すものとして解したこととなるが、そこにも問題がある。つまり過去、未來、現在の順に述べる中で、何故に過去の如來云々の箇所にそれが述べられるかが理解できなくなる。そしてまた、abhūsi がかりに未來の意味を有するとしても助動詞とは異つてアオリストの形が用いられたことの意味が考へられねばならない。

以上の簡単な考察からではあるが結論として、abhūsi は ✓bhū のアオリスト 3. pl であり、過去の意味として訳すのが適當であると考える。しかし思想的内容としては過去、未來、現在を含んだものと解釈し得る。すなわち、過去的意味において「悟り」に対する証を、未来的意味としてその約束を、現在的意味においては強い如來の誓願を示しているのである。もちろん全体としては如來の誓願におさまるものである。このことは結果的には abhūsi を過去として考へ、未來、現在の箇所に小善成仏の記述が略されたものと解釈するのとほとんど等しいものとなつ。